

宝船展 2018 出展記録

作品 No.12：たにじゅん日記～the diary of TANIJUN～
埼玉大学 教育学部 学部3年生 谷川 潤（たにかわ じゅん）



自分自身の作品について（↑が今回展示させていただいた作品の画像データです。）

今回の宝船展 2018 を振り返るに当たって、まずは、自身が出展してみてもういった経験ができたかをまとめてみたいと思います。こういった展覧会に個人として出展するのは初めてでしたが、思った以上に自分の個性・アイデンティティーというものについて考える時間を自分に設けることのできる機会になりました。個人として、どこに属しているかどうかはさほど問題とされず、“表現者・クリエイターの一人”として見られる・評価されるあの場所は、僕自身がこれからどうしたいのかを掘り起こしてくれる大きな要因になったように思えます。率直に感じたのは、「俺、やっぱり全然描いてないな」でした。自分がどんな方向性でいきたいのかとか、それを叶えるためにはああしなきゃだめだとかこうしないとできないとか考える前に、とにかくまず、「描かねば。もっと描きたい。」そう思いましたし、今も思っています。湧き上がるこの「描いてみたい・描きたい」をしっかりとある程度消化しき（るなんてことがないことは分かってはいるのですが）ってから、自分があらわしたものを見渡してみても遅くないのかなと感じています。とにかく、描きます。

他の出展者の方々とそれぞれの作品について

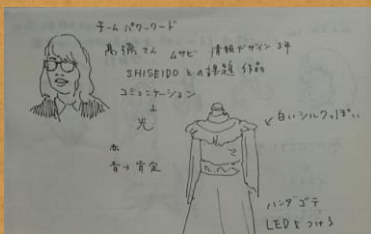
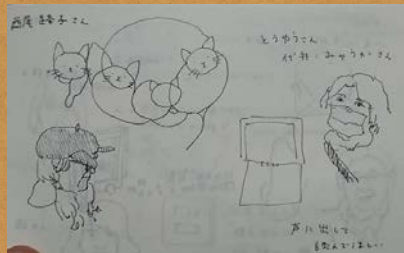
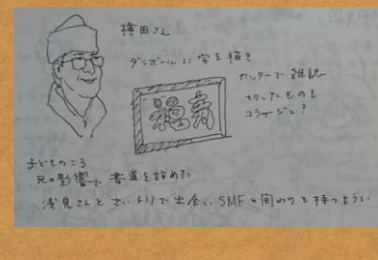
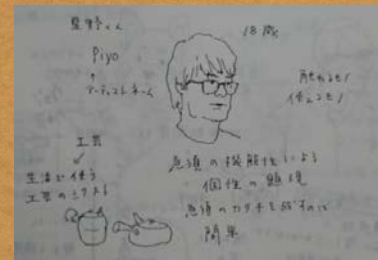
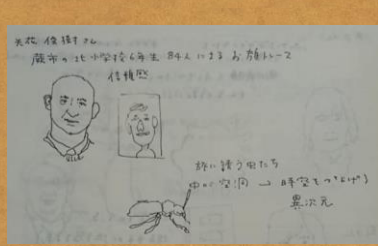
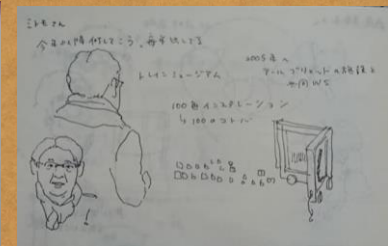
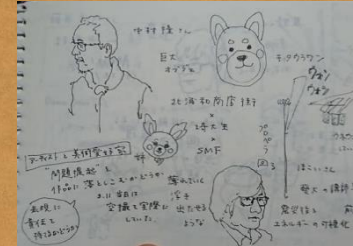
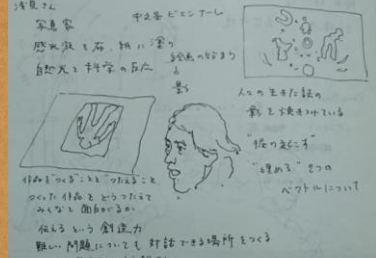
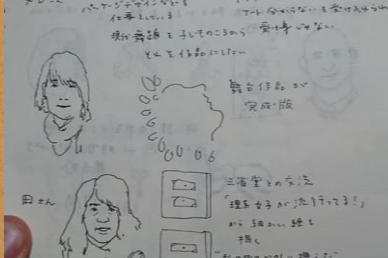
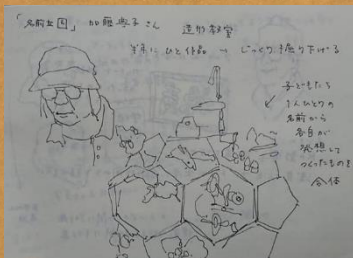
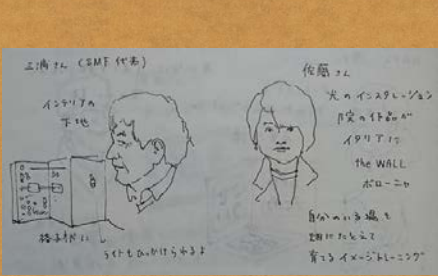
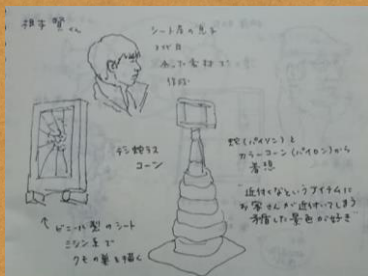
社会人として、クリエイターとして、表現者として生計を立てている人たちとの展示は初めてでしたし、大学3年生の自分としても「結構思い切ったチャレンジかな」なんて怖気づいてしまっていたのに、いざ参加してみたら、高校生が物怖じすることなく堂々と自分の作品について語っているし、その作品自体もユーモアと真摯さに富んだ作品だしで、すっかり自信を無くしそうな、でもそれでいて、頼もしいこの後輩ちゃんたちに負けたくないなというような情熱が胸からこみ上げてくるような、いやしかし何だこの空間は楽しいなおい！って感じの心境でした。故に、ギャラリートークではすっかり熱が入ってしまい、出展者の皆さんが話している様子をドローイングとして描いてしまいました。（笑）（右ページに掲載）

あまり作家として踏み込んだ話を皆さんとできたわけではなかったのですが、（作品 No.5）KAPL さんの「本音会議」に参加させていただいてお題に合わせたお話をしたり聞いたり、先に紹介した高校生とも交流を深めたり、ドローイングを通して、「描く・書く」ために「みる・きく」ことを通して皆さんのことを知ろうとしたりすることができたかなと思います。

ギャラリートーク中にドローイングとして描かせていただいた作品や作家さんはしっかりと記憶に残っているのですが、その中でも強く残っているのは、パフォーマンス展示をしていた（作品 No.13「クウのキオク」）の DamaDamTal さんと（作品 No.1「現在の青図」）浅見 俊哉さんのコラボパフォーマンスです。

パフォーマンスの内容も、突発的に始まるフラッシュモブ的な動きと語りの、波とか時間の流れを感じるような

「動」の雰囲気と光を湛えた青色の中空に佇むようなぴしっと止まった「静」の雰囲気が織り交ざるような感じで、とても印象的な作品でしたが、その後の“本音会議”での、DamaDamTal さんのパフォーマーであるみきたまきさんの異分野の作品・パフォーマンスにおけるコラボレーションの難しさについてのお話がさらに印象深いものでした。「ただ作品の前で踊るだけでは、コラボレーションとして成り立たない。何か、核となるものを（コラボし合う作家・パフォーマー同士が）お互いに持ち合わせていないといけないと感じている」という（ようなことをおっしゃっていたような）言葉が胸に残っています。コラボレーションアートという分野においても、忘れてはならないのが“コミュニケーション”なのだなと考えた時間でした。



刺激をたくさんいただいた初夢でした。

夢を夢のままにしないように踏ん張る！

2018/02/15 たにじゅん